

[COMMUNION]

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.html>E-mail: comm.tko@nskk.org

PHONE: 03-3433-0987

FAX: 03-3433-8678

Diocese Office



第48号

(通巻1283号)

2018年12月23日

編集: 広報委員会

委員長: 渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園 3-6-18

祝クリスマス ― 神の謙遜 ―

東京教区管理主教 ゼルバベル 広田 勝一

イエスの誕生を最初に祝った人々は、羊飼いでした。羊の所有者ではなく、雇われていた彼らは、低い立場に置かれていた人々でありました。しかし神はそのような彼らに近づきます。暗闇を主の栄光が照らし、そこに喜びが生じました。続いて東方からの学者たちが登場します。聖書では、東は追いやられる場所としての周辺を指します。アダムとエバが追放されたのも東です。続いて創世記4章で、弟を殺したカインが追いやられるのも、エデンの東、ノドの地でした。その東からやってきた学者たちが、権力が集中している都エルサレムではなく、小さな村ベツレヘムで、幼子に出会い、新たな旅立ちへと変えられました。救

い主の誕生には、家畜小屋での誕生も含めて逆説が示されます。神たるものがこの世に降り、人となる：大いなる逆説がここにあります。御子イエスの誕生の中に、私たちは十字架を見ます。まぶねの中に生まれたイエスの十字架への生涯、ここにも誕生という喜びから苦難の十字架という逆説があります。神が人となられる、まさに神の究極的な謙遜が、その誕生の中に、十字架の中に示されているのです。

の喪失です。私達は、この世界に、また私達の心に、父のふところにいる独り子（ヨハネ11:18）を得ました。神は、自分の独り子を失った、それが、父なる神にとつてのクリスマスです。でも神は、自分が大切な、かけがえないものを失って



住み（スケーノオ）、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」神の幕屋が人の間にあり、神が人と共に住まわれる。それゆえ私達の涙は、苦しみは、まさに喜びへと変えられる、その具体的出来事が、まさにクリスマスなのです。言は肉となつて私達のうちに宿られた。何があるうとも御子イエスは、私達の只中に一緒に生きてくださるお方であることを、心に留めておきたい。神はインマヌエル、共にいます神であり、それによつて私達はキリストによる新たな自己を生き、希望・喜びへと導かれるのです。

救い主の誕生の喜びと共に、新たな主教の誕生を喜びと感謝をもって迎えましょう。皆様の上に神の豊かな祝福をお祈り申し上げます。

クリスマス・メッセージのプレゼント

今年は、聖職、聖職候補生の皆様にクリスマス・メッセージをお願いいたしました。どうぞ言葉の素敵なプレゼントをお受け取りください。(注：50音順で掲載、司牧教会名等は省略)



司祭 井口 論

「だからこそ、クリスマス」

イエスは、ユダヤのベツレヘムの家畜小屋で羊飼いたちに囲まれてお生まれになりました。ヘロデ王の手を逃れた後、ベツレヘムの2歳以下の男の子が一人残らず殺されました。降誕教会の壁には、無数の銃痕があります。パレスチナの人々が逃げ込んだ教会をイスラエル軍は、窓めがけて銃を撃ち続けました。今、パレスチナの人々は、ガザとヨルダン西岸に閉じ込められています。西岸には至る所に8メートル程のコンクリート製の壁がつくられ、パレスチナ人の生活を脅かしています。だからこそ、イエスはベツレヘムにお生まれになったのです。今、日本のベツレヘムは、極度の低賃金で働かされている外国人労働者になるのでしょうか。だからこそ、クリスマスがあるのです。



クリスマス、神様はイエス・キリストという光をわたしたちにプレゼントしてくださいました。飼いの葉桶に眠る赤ちゃんは、弱く小さなロウソクの光のようです。しかし、暗闇で灯されたロウソクの明かりは強く、あたたかさすら感じられます。その光に照らされながら、闇には希望、寒さにはぬくもりが届けられます。寒く暗いこの季節、一人でも多くの人が赤ちゃんイエス様のぬくもりに包まれますように。

司祭 大森 明彦

立教女学院では12月2日降臨節第1主日の唱詠晩禱に始まる合計12回のクリスマス礼拝が続きます。ひとつの敷地の中で、これほどクリスマス礼拝がある学校があるでしょうか？12回と言いましたが、クリスマスツリーの点灯式などを加えれば、14回です。天使園、小学校、中学、高校、短大までの学院各校が大切にしてきたクリスマス礼拝をそれぞれにささげるのは今年が最後になります。しかし、何



かの終わりは何か新しいことの初めでもあります。新たな歩みに神の祝福と導きがあることを信じて、クリスマスの喜びを分かち合いたいと思います。東京教区の皆さまお一人おひとりにクリスマスの恵みがありますようにお祈りしています。

司祭 神崎 和子

「救い主が来られる」

「言の内に命があつた。命は人間を照らす光であつた。光は暗闇の中で輝いている。」(ヨハネによる福音書 1…45a)



主イエスは、新しい世界をもたらすためにこの世にお生まれになりました。この世に救いの希望をもたらすために来られました。この不条理に満ちている世界に平和をもたらすために、暗闇の中に灯る蠟燭の光のように、救いの光として誕生されました。

苦しみや孤独の中にいる人々の救い主として、すべての人が、神から愛されている事実を知るようにと、この世に誕生されたのです。それは2千年前の出来事に終わらず、時を越えて、今も変わらず救いの手は差し伸べられています。この救い

主イエス・キリストの誕生を共に喜び祝いましょう。

司祭 金 大原

暗闇の中に光となつて来られたイエス・キリストの降誕を迎え、すべての人の上に神様の豊かな恵みが注がれますようお祈りいたします。最も弱い赤ん坊の謙遜な姿で、ご自身を低くして人間の歴史の中に望まれたイエス降誕の神秘を黙想し、人間の救いに必要な徳目は謙遜であることを忘れませんように。謙遜とは、自分でない他の命を尊重し、周りの悩みや苦しみに耳を傾け共感することです。その謙遜には自己犠牲が必要であり、その犠牲は感動を生むでしょう。2018年のクリスマスが、そのような感動に満ち溢れますように。



司祭 ケビン・

シーバー

「世界一祝われる誕生日」



他のどんな人物よりもナザレのイエスの誕生日が大事にされる。世界中の街でクリスマスツリーが飾つてあり、クリスマス音楽が流れ、イルミネーションが街道を变身させる。もち

司祭 太田 信三

「光は暗闇の中で輝いている」



ろん殆ど商売目的ではあるが、きっかけはキリストの誕生日なのだ。また、世の中のパソコンやスマホはすべて2018年前のイエスさまの誕生日から時間を数えている。当たり前のことだ。キリストのご降誕は史上最重要な出来事だから。全能で永遠の創造主である神ご自身がそのお造りになった世界に入って来られた日だ。しかも、力みなぎる権力者としてではなく頼りない赤ん坊として現われた。それぐらいまことの神がこの世を愛し、罪の悲劇からわたしたち人間を救いたかったのだ。

執事 佐久間 恵子

私たちはどこへ向かうのでしょうか。今年も災害に見舞われた多くの方々がいます。紛争等によって、傷つき疲れている人々がいます。格差の広がり続ける社会では、苦しい生活を強いられている人々も増え続けています。閉塞感是我たちの生活に覆い被さっています。私たちはどこへ向かえばよいのでしょうか。このような時だからこそ、救い主イエス様の教えと生き方を私たちが生きる拠り所とし中心として、物事を見極めていかなければならないのではないのでしょうか。今



年も救い主を私たち一人ひとりの心にお迎えする時がやって来ます。どんな時も私たちと歩んで下さる神の愛を思い、救いのみ業を信じて、一緒にイエス様のお誕生に感謝しましょう。

司祭 佐々木 道人

「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。」

〈ヨハネ福音書1:14〉



ヨハネ福音書は、主イエスの降誕について、ルカ福音書のような物語ではなく、哲学的な「受肉」の宣言で福音書を書き始める。この言葉「肉・サルクス」は肉屋にぶら下がっている正に物体の「肉」。「神がその肉となった」という言葉は当時(あるいは現代)の人々にとりショッキングなもの。「神が肉となる」という短い表現が、私達の抱いている神観念(神は永遠不変で、不動、超越的・はるかに高いところにおられる)を造り変える。しかしその人こそが正にイエス・キリストのこと。我らの常識に逆らいやって来られるイエス・キリストに、改めてこの手で触れてみたい。

司祭 佐々木 庸

クリスマスと言えば子どもの時には、サン



タクロースのプレゼントに心を高ぶらせたものです。3人の占星術の学者達は黄金・乳香・没薬を飼う葉桶に寝かされている幼子に捧げました。人間の捧げ物の前に、神は独り子を贈ってくださいました。両親にすべてを委ねて眠っているイエスに私たちは何を捧げたら良いのでしょうか。

司祭 笹森 田鶴

厳しく寒い季節に、乳飲み子としてこの世界に突入してください。



た救い主を思い起こします。この小さく脆い存在が神の救いの確かさの現れであったことによって、わたしたちの世界に大変革がもたらされました。クリスマスを祝うとは、その大変革をわたしたちの喜びとしていくプロセスなのだと思います。世界はまだまだ変わっていないように思えても、それでも神様の働きはこの世界で続いており、脆さにこそ神様は目を留めてくださいます。教会はその変化と喜びを世界に伝える器です。本来のその働きにわたしたちが留まり、キリストの再臨を心待ちにできますように。クリスマス喜びが、孤独の中にある方々、痛みの中にある方々に届きますように。

聖職候補生

下条 知加子

♪むかしユダヤの人々は

神様からのお約束 貴い方のお生まれを

うれしく待つておりました

♪貴い方のお生まれを

みんなでたのしく祝おうと

その日数えて待つうちに

何百年もたちました

(幼児さんびか27番1、2節)

決して安穩とした中ではなく、次々と起こる辛い、悲しい、苦しい出来事に絶望しそうになりながら、「貴い方」を待ち続けたユダヤの人々。

今この時、尊い方を、平和の君の到来を待ち続けている人々に思いを致したいと思います。

真に平和な社会に向けて、仕えてゆく者とされますように！

司祭 下条 裕章

クリスマスを意識すると、必ず心の中に響いてくる言葉があります。



キリストちたび(千度)ベツレヘムに生まれたもうとも、



なんじのうちに生れざれば、
なんじなお、永遠に救われず。

アンゲルス・シレシウスという宗教詩人の歌の一節。40年ほど前に手にした1冊の本・「聖なるドラマ 聖餐式の話」(相澤誠四郎司祭著)の冒頭で紹介されていました。クリスマス、主はみなさんとともに。

司祭 須賀 義和

日本では多くの場合恋人たちの祭りであり、サンタクロースがプレゼントを子どもたちに渡す日です。素敵なクリスマス・ケーキが用意され、家の中にはクリスマス・ツリーやクリブが飾られているのでしよう。



からの最初のクリスマス・プレゼントであるイエス様を私たちの心の中に迎え入れたいと願います。

司祭 菅原 裕治

今も心に残るクリスマスメッセージがあります。約30年日本基督教団の牧師になりたての頃聞いた勤務教会の主任牧師、西村俊昭先生の説教です。構造主義的聖書解釈の旧約研究者であった先生は、マタイ福音書の誕生物語に、ヨセフは夢で、そして占星術の博士たちは星で導かれるが、幼子イエスとの出会いによって、博士たちが夢で導かれるように転換する構造があることを示し、幼子イエスに出会うことによって、自分の歩む方向が新たにされる大切さを語られました。聖書の物語は歴史的批判的解釈を求めますが、その構造自体も使信を語ります。多くの人がみ子に出会い、平和へと転換していくように、今年もクリスマスをお祝いしたいと思います。



司祭 杉山 修一

「混沌への光」

神学生の時「混沌への光」(左近淑)とい



う本を読んだ。紀元前6世紀、イスラエルの捕囚期、国家滅亡、体制崩壊の混沌とした時代を創世記の記者は「暗闇が淵をおおい、強風が水面を吹きまわっている」という言葉で表現したとあった。現代も何が正しく、何を根拠に生きていけばよいのか個人も世界も不確定で不安定な時代を迎えている。暗闇と強風が吹く時代のただ中に「神は言われた『光あれ。』」として光があった。」との決定的な言葉が告げられ、世界に秩序が与えられた。やがて混沌とした闇の世界にその言葉は光そのものであるイエス・キリストとなってこの世に來られた。クリスマスはこの根源的な「混沌への光」に出会う喜びの時である。

司祭 スティーブン・クロフツ

「ready, steady, slow」



忙しい生活の中、毎年クリスマスはいつもいきなりやって来るようです。私と家族は、10月ぐらゐから子供たちと海外にいる家族への贈り物を準備します。それでも2ヶ月はまだ十分ではなく、いつもギリギリに済ませてクリスマス

を迎えます。イギリスでは豪華で貴重な食事の準備にも時間がかかります。毎年のクリスマスを迎えるかけっこの「ヨーイドン!」の表現のようにみえます。英語の表現として、それは「Ready, Steady, Go!」と言います。しかし、大切な赤ちゃんに会う時、私たちは全てのスピードを落として、ゆっくりと幼な子を抱き抱え、迎えるでしょう。クリスマスはもっと「Ready, Steady, Slow!」つまり生活のスピードを落とす時なのです。私たちが忙しい生活の中においても、誕生したばかりの聖なる幼な子を覚えて、一緒にゆっくり彼に会いましょう。

司祭 高橋 顕

世の権力者ローマ皇帝が「役に立つ人間」の数を調べる人口調査をしていたある夜、イエスは生まれ、布にくるまれて飼いの葉桶の中に寝かされた。この「命」の姿は、最も小さくて、弱くて、貧しい。「役に立つ人間」とは全く反対の姿だ。しかしこの姿は私たちに示す。あなたはただでいい、あなたは生きてただけで素晴らしい、と。



飼い葉桶の中の幼子イエスは私たちに語りかける。そのままのあなたを愛しているから、もう悩んだり心配したり泣くのはやめて、と。私たちはこの世界に來られたイエスの「命」ですつとみんな生きていく。その「命」がこの世界に來られたクリスマス。その「命」が今はじまっている。その「命」は人間を照らす光。

司祭 高橋 宏幸

「サンタクロースに」

子どもの頃、12月24日の夜、どこから



入ってくるのだろうか、何で欲しい物を知っているのだろうと思いつつサンタクロースを心待ちにしていました。もちろん今では、赤い服を着、トナカイが引く橇に乗り、白い髭のサンタクロースが來ると思っています。誰かが誰かがサンタクロースになることはできると信じています。仮装ではありません。誰かの心に耳を傾けたり、言葉少なくとも不安の内にある人の手を握ったり、小さくとも優しい微笑を向けたりと、形は様々あるでしょうが、「あなたを一人暗闇に

置き去りにはしない、闇の中にも光が」というメッセージを送ることはできません。プレゼントは貰えなくても、あげることは出来るのですから。

聖職候補生

高柳 章江



クリスマスの深夜、私はいつも三好達治の

「雪」という詩を思い浮かべます。

「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪

降り積む

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪

降り積む」

降り積もる雪はまるで神さまの愛のようです。神さまの愛は、雪のように世の中の余計な音を吸収し、静けさの中で、どんな人の上にも、幸せな人にも、悲しみにくれている人にも、いい人にも、悪い人にも降り注ぐのだと思えてきます。そして、雪が降ってきたことに最初に気づくのは家のない人たちののだということに、私は神さまの憐れみを感じて、いつも泣きそうになってしまふのです。

司祭 卓 志雄

わたしは2千年前の飼い葉おけのように、イエス様を寝かせ



ている飼い葉おけであるのか、と考えている。わたしの飼い葉おけはイエス様が寝られる飼い葉おけなのか。もしかして欲望が、お金が、名誉が、知識が、高慢が、偽善が、憎しみが、恨みが満ち溢れていてイエス様が寝られるスペースがないかもしれない。クリスマスは自分の飼い葉おけを空っぽにしたい。1年に1回だけ空っぽにすることではない。毎日自分の飼い葉おけを空っぽにしなければならぬ。毎日わたしのの中にイエス様が生まれて寝られる飼い葉おけを用意しなければならぬ。毎日わたしのの中に生まれるイエス様が安らかにいられますように要らないものは捨てたい。そしてキリストを迎え入れたい。

司祭 塚田 重太郎

悲しみの涙でクリスマスイルミネーションが見えなくな



るとき、あるいは大きな苦しみの中で、クリスマスの華やかさが無意味

に感じられるとき、それはクリスマスの本当の光、イエス・キリストがあなたの内に到來するときです。

司祭 中川 英樹

12月25日、わたしたちの救い主の誕生を祝う、この日。多くの



人たちは、そんなクリスマスの意味など知らずとも、「だって、今日はクリスマスだから」って、ただそれだけを理由に、あの人、元気かな、と誰かのことを案じてみたり、大切な家族や人のことを想って、プレゼントを用意したり、ケーキを買ってみたり、いろんな嫌なコトがあっても今日だけは考えない、争うこともしない、悪口も云わないって想えたり、小さなことでも人に親切にできたりする。「だって、今日は、クリスマスだから」そう云って、自分以外の他者に「優しく」できることって、こんなに人と人との間が綻んだ時節の中で、単純素朴に、とても素敵なこと、そして凄いいことだと想うのです。「だって、今日はクリスマスだから」それを理由に皆が互いに優しくなれる、この事実だけがクリスマスの真実を物語っているように想います。

司祭

中村 邦介

愉しく華や

かなクリスマス



びとは何であり、どこにあるかを渴望する叫び声のように聞こえてくるのです。

司祭 中村 淳

こどもたちに囲まれた日々を過ごし、自身の



北東部ゲイツヘッド（戦後ベ
ルギーからの移民が多く住ん
でいる貧困な地域）での経験
です。信徒たちはクリスマス
が近づくと、その地域で懸命
にある活動を開始します。そ
れは「クリスマス病」に罹ら
ないようにする取り組みで
す。そこでは親たちが日頃子
どもたちに充分なことをして
あげられないので、クリスマ
スにはたとえ高額なローンを
組んでも法外なプレゼントを
しようとするのです。この「ク
リスマス病」は、まさに貧し
さゆえに起こってしまう哀し
く痛みに満ちた物語です。ク
リスマスの朝には、町の到る
ところで大喜びする子供と大
泣きする子供が出現するのだ
す。それは、クリスマスの歓

司祭 宮崎 光

「クリスマスに闇を見よう」



よう」

クリスマスには、闇を見よう。闇を見究め、夢を見よう。「光は暗闇の中で輝いている」。

もう、そこは、闇ではない。闇に向かえば、光に遭う。

「暗闇」を見つめてみましょう。心の中にある「暗闇」も。情けなくて、恥ずかしくて、誰にも知られたくないことかもしれない。それを「暗闇」と認識してみましょう。そのために、「誰にも知られたくない」と想

う「誰か」が重要です。「誰か」は、誰ですか？この「暗闇」に御言葉をともしましよう。「光は暗闇の中で輝いている」(ヨハネ1:5)。もう、そこは「暗闇」ではありません。照らしだされたくない「暗闇」だとしても「恐れることはない」。ちよつとした勇気で「暗闇の中に輝く光」に出遭えます。

講演会のお知らせ…お話し 高橋宗瑠さん
『今、パレスチナで何が起こっているのか』

正義と平和協議会のサ
ラーム・パレスチナでは
2016年春から読書会で
『パレスチナ人は苦しみ続
ける』という本を読み進め
てきました。この本の著者

は2014年5月まで4年
余り国連人権高等弁務官事
務所パレスチナ副代表を務
めておられた人権活動家の
高橋宗瑠(そうる)
さんです。



本の内容はふだ
ん新聞やテレビで
見る情報とはかな
り違うもので、私
たちが聖地旅行をしたとき
に感じたことを裏付けてく
れるものでした。読みなが
ら、ぜひ講演会を企画した
いという思いを強くしまし
た。と言うのはこの本が出版
された2015年はトラン
プ大統領に代わる前でした。
新大統領就任後、パレスチ
ナ・イスラエルの状況は大
きく変化し、アメリカは次々
とイスラエル重視の政策を
打ち出しています。なかで

も今まで何十年も実施され
なかったテルアビブのアメ
リカ大使館をエルサレムに
移転しました。
イスラエル国内でも『イス
ラエル独立宣言』ではす
べての国民が平等な社会
的・政治的権利を持つとあ
るのに、今年7月にユダヤ
人だけが自決権を持つ『ユ
ダヤ人国家法』

が制定されまし
た。今後、アラ
ブ系イスラエルのパレスチナ
人の状況にどのよ
うな影響があるか予断を許
しません。その辺も含め、
いろいろお話を伺えること
を期待しています。

講演に先立って、高橋さ
んの叔母さま、関晴子さん
のピアノ演奏もありますの
で、どうぞ皆様、1月19日
(土)の午後1時(開演)、
神谷町の聖アンデレ教会の
奥にある聖アンデレホール
にお出ください。

(サラーム・パレスチナ)

私たちの教会 [35]

ようこそ清瀬聖母教会へ



2019年、私たちの教会は創立70周年を迎えます。教会誕生の頃から、ハイチャーチの伝統が重んじられ、礼拝は香の煙

(かおり)が漂う

中での歌ミサでした。また、初代牧師の工藤義雄主教の呼びかけで、信

徒の子どもたちがアコライトを担うという伝統が続けられてきました。

その伝統は途切れつつありますが、その一方で、数年前から、日曜学校

に豊かな恵みを与えられています。

立教大学GFSのメンバーが、日

曜学校の活動を支えてくれているのです。月1回の子ども礼拝の他、夏のキャンプやクリスマスの聖劇にも、加わってもらい、子どもたちの豊かな交わりが持たれています。少子化に伴い、日曜

学校には、子どもだけでなく、おばあちゃん、おじいちゃんも参加します。小さな子どもたち、そして大学生と共にイエス様と出会い、聖書、そして礼拝の意味を学ぶ。次の世代を育てる日曜学校は、大人たちにとっても学びの場になっています。

聖母教会は、椎やコナラ、栗などの雑木林の中に聖堂

が建ち、裏手には竹林が広がっています。春にはタケノコ掘り、夏には、成長した竹を使つて、そうめん流しを企画します。季節を通じ、神さまからいただく恵

みを、地域の皆さんや他教会の皆さんとシェアしています。一方、聖堂前のお庭は、いつも色とりどりの花で飾られています。聖堂内に飾るフラワーを、教会の庭から調達することができ

るほどの豊かさです。お庭の担当はグリーンフィン

ガース。広い敷地の環境整備には手間も資金もかかります。信徒の数が少なくな

る中で、豊かな環境をどう維持していくのか。これからの課題です。

ここ数年、聖霊降臨日には、全生園聖フランシス聖

エリザベス礼拝堂で合同礼拝を行っています。信徒数の減少という悩みを抱える者同士、交流の機会を大切にしています。

戦後、結核療養の町だった清瀬。「祈りの場が欲しい」という患者たちの声から、聖母教会は誕生しました。今も、近隣にある病院への入院や通院をきっかけに、教会を訪れてくださる新しい信徒の方々がいます。病を抱える者もそうでない者も、共に集い、歌い、心を合わせて祈る。年齢の違いも越え、日本人も外国人も、障がい者も健常者も分け隔てなく、一同で聖卓を丸く囲み、聖餐式にあずかります。あの頃のように共に集う。そして主は、私たちの真ん中に立ってください。

（村松陽子）

《信徒リレーエッセイ》

祈り、交わり、学び、

仕える。使える教会！

東京聖テモテ教会

田島 正城

私は東日本大震災の年のクリスマスに文京区の根津に引っ越しし、たまたま通りかかった聖テモテ教会のイブ礼拝と聖餐式に参加し、居心地のよさにそのまま居ついてしまいました。写真は「教会問答する会」

がホー

ルで行われ、天と

地をつなぐキリス

トの体にあずかる

聖餐を学

んでいる様子です。この

ホールで、学び、愛餐を通して交わり、障がいがある

子とない子の統合保育が行われ、AAの分かち合いが

参加者の今日一日に光を与え、弥生1丁目の町会が集

まって大災害に備えて話し合っています。使えるホー

ルですね。これらはすべて信徒と牧師の無数の奉仕に

支えられており、仕えるキリストを証しています。



BSA第103総会報告

日本聖徒アンデレ同胞会（BSA）は11月24日（土）に、東京教区聖マルコ教会で第103総会を開き、2019年度の事業活動計画・同会計収支予算（案）を承認しました。

また、この総会で5人の新会員を迎えました。

事業活動計画では、2019年度をBSA創立100周年

（2027年）記念準備の初年度として、BSAの「インフラ整備の年」と位置づけています。具体的には、

1 BSAの裾野を広げ、支持基盤を強化する。

2 BSAの露出度を増やす活動の展開

3 会員一人一人を大事にする運営

4 創立100周年プロジェクト（仮）の立ち上げ

これらを基本コンセプトとして、支部との関係強化、青少年キャンプ、BSAセミナー、研修旅行、会報VIS

IONの充実などの諸活動を展開します。

また、財政面では、旧法人から引きついだBSA基金とポール記念基金が今年度で終了しました。今後は会の主たる収入は会費のみとなるため、その範囲内で活動計画を考えることが必要となります。

後藤務財務担当理事は、「数字だけを見ると、悲観的なものしか見えてこないようにも

思える。しかし、



BSA本来の精神である『祈りと奉仕』を通して良き知らせを広める信徒活動の原点に返るな

らば、この機会を創立100周年を目指す新たな挑戦の時に捉え、小さな力しか持たないかもしれないが、この財政状況を乗り越えて、御国の実現に向けなすべきことを見出せるのではないかと述べています。

BSAに対するご支援に感謝を申し上げますとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。（理事 吉松英美）

30年を経て与えられた団らん

カパティラン理事長 牧野 兼三
今年カパティランは30周年を迎えることができました。11月3日に、この30年を支えてきた、かつてのスタッフ、理事、そして長年にわたっての支援者の方々が一同に会し、記念礼拝をお捧げし、ささやかなお祝いをしました。

カパティランの歴史は、1988年10月にスタートした前身である「フィリピン小委員会」が、当時エンターテイナーとして出稼ぎに来ていたフィリピン人女性たちの為に、英語ミサを行ったことから始まっています。それから30年、現在支援している子どもたちは、フィリピンのみならず海外にルーツを持つ子どもたちで、国籍、勉強、貧困、そして「自分は何者であるか」というアイデンティティの確立に問題を抱えています。

「あなたがたと共にいる寄留の他国人を、あなたがたと同じ国に生れた者のようにし、あなた自身のようにこれを愛さなければならぬ。あなたがたもかつてエジプトの国で他国人であったからである。」

(レビ記19章34節)

奨学金支給とごはん会の開催が主な支援活動です。現在奨学金受給者は12名（高校生5名、大学生7名）ごはん会に集まる子どもたちは30名近くになります。小学生から大学生までの様々なルーツを持つ子どもたちがテーブルを囲む食卓。それはまるで、神様によって与えられた新しい家族の団らんのようなものです。

ここから一人でも多くの子どもたちが巣立っていきけるように、スタッフ、理事一同、これからも微力ながらカパティランのために力を尽くし

ていきます。

みなさまの日頃のご支援に感謝いたします。

すとともに、今後ともカパティランをお支え

頂きますよう、よろしくお願

いたします。

次回 大斎節号

2019年3月3日発行予定



ちょっと聖書、ときどきユーモア（四十）

1. 正しい判断

妻「あなたは、いつも自分の判断が、神さまみたいに正しいと思っているんだから」

夫「そんなことないよ、少なくとも君と結婚した判断だけは・・・」

2. あるクリスマスの標語

クリスマスの時期に、ある教会の前を通りかかると、掲示板にこんな標語が掲げてあった

「クリスマス デートするなら 神さまと」

3. クリスマスなぞかけ

① クリスマス・イヴとかけまして、ベジタリアンのパーティーと解きます。

そのココロは、「前夜祭（全野菜）」です。

② 「マリアさんとヨセフさん」とかけまして、日本の年末と解きます。

そのココロは、やはり年末はお・歳暮（聖母）と第九（大工）です。

4. 新主教誕生

信徒A「新しい主教が誕生したけど、君はどう思う」

信徒B「そうだな、杉花粉みたいな気持ちだな」

信徒A「えっ、良く思っていないの？」

信徒B「違うよ、『待ちに待ってました（町に舞ってました）』ということだよ」